

15歳妹2人抱え残された

「戦争は2人の兄を奪っただけでなく、私は15歳で2人の妹とともに子どもだけで残された」。京都府亀岡市の佐々木幸夫さん(84)は、これまで家族にも多くを話さなかった戦中・戦後の過酷な日々を、この夏初めて京都平和遺族会の集会で語りました。

証言

戦争



「命のある限り若い人に伝えていこう」と語る佐々木さん

京都・亀岡市在住

佐々木 幸夫さん(84)

佐々木さんは1933年(昭和8年)、亀岡市南端の山間地で生まれました。農家の8人きょうだいの6男。3人の男児は幼くして亡くなりました。日本の敗戦を前後して8年で両親、祖母、兄2人を次々と失いました。

長兄の幸雄さんは中国で戦死、次兄の武夫さんは理不尽な軍隊生活で心身を病み、復員から3年後に自殺しました。

佐々木さんは15歳で「戸主」として一家を背負うことに。妹2人は小学生でした。

戦後の食糧難のなか働き手が足りず、生産がうまくいかないのに強制的に米を供出させられました。米をつくりながら飯が食べら



1940年に陸軍歩兵第20連隊に臨時召集された長男幸雄さんの面会に訪れた佐々木さん一家。右から幸雄さん、母ますえさん、(1人おいて) 武夫さん。左端は父藤太郎さん

れない困窮のどん底。「どんなにひどい思いをしたか。野草や桑の実、野イチゴなど、食べられるものは何でも食べてしのいだ」といいます。

中学を卒業すると米作りが、子どもの足の皮は薄く、靴がなく素足で田に入ると、子ども足の皮は薄く、痛みで夜も眠れない。しの復旧工事などに従事。親身になってくれた叔父や近所の人の援助で一つ一つ仕事を覚ええました。

「30枚の棚田で田植え、草取りなどすべて手作業。歯をくいしばり、涙をこらえて這いつくばって働いた。伸びてきた稲が目を突壊しました。」

そのとき地域に入った大學生の救助隊が、農民たちに紙芝居で広島原爆の恐ろしさを語りました。

食い入るように絵を見つめ、聞き入った佐々木さん。「衝撃でした。戦争で苦しんでいるのは自分だけではない。もっと悲惨な多くの犠牲者がいる」と

自分は戦争で苦労したのだから、戦争をなくすために生涯を捧げられたら兄に報いることができるのではないかと。佐々木さんは、青年団の活動を通して日本共産党に出会い、18歳で入党しました。(11面につづく)

や山仕事、水害後の田や川の復旧工事などに従事。親身になってくれた叔父や近所の人の援助で一つ一つ仕事を覚ええました。

「30枚の棚田で田植え、草取りなどすべて手作業。歯をくいしばり、涙をこらえて這いつくばって働いた。伸びてきた稲が目を突壊しました。」

そのとき地域に入った大學生の救助隊が、農民たちに紙芝居で広島原爆の恐ろしさを語りました。

食い入るように絵を見つめ、聞き入った佐々木さん。「衝撃でした。戦争で苦しんでいるのは自分だけではない。もっと悲惨な多くの犠牲者がいる」と

自分は戦争で苦労したのだから、戦争をなくすために生涯を捧げられたら兄に報いることができるのではないかと。佐々木さんは、青年団の活動を通して日本共産党に出会い、18歳で入党しました。(11面につづく)

証言



戦争

(一面のつづき)

佐々木幸夫(ゆきお)さんの14歳上の長兄、幸雄(さちお)さん(当時)(20)

もう会えない…

品港を経て、中国への侵略戦争に駆り出されました。出発前、外泊で帰宅した兄を2時間離れたバス停まで送っていきましました。「雨の入隊。福知山から広島・宇その日のことは今も忘れま

「語り部」を決意 佐々木幸夫さん



平和遺族会の集会で初めて体験を語る佐々木幸夫さん

9条は戦死者の「遺言」

長兄は地雷踏み、次兄は列車に…

せん。幼いながら、もう会えないのではないかと胸が締め付けられました。幸雄さんは44年6月、湖南省で肉弾戦が繰り返されるなか、地雷を踏んで戦死しました。

同年、5歳上の次兄、武夫さんが海軍航空隊に入隊。九州を転々とし、米軍の爆撃を受けた滑走路の穴を埋める作業に従事、敗戦後の8月に復員しました。

武夫さんはよく冗談をいう明るい性格でした。しかし、快活さは失われ、軍隊での過酷な体験を繰り返し周りに話しました。

「覚えが悪い」といっては責められ、「軍人精神注入棒」という極(かし)の木の棒で青い筋が何本もつくほど尻をたたかれ、腫れあがり、大便をするのがつらかったこと。

理不尽な日々

軍隊での理不尽な日々は武夫さんの心身に深い傷を残していました。復員後1年で父を亡くし、18歳で結婚、子どもが生まれましたが、弟妹を抱え、のしかか

る生活苦と尽きない不安…。武夫さんは列車に飛び込み命を絶ちました。21歳でした。

45年3月、空襲を受け一面の焼け野原になった大阪で、義理の祖母を探し求めて見た凄惨(せいさん)な光景は、いまでも脳裏に焼き付いています。

「戦争で苦勞した自分だから戦争をなくすために命を捧(ささ)げる」。この思いを原点到、佐々木さんは70歳まで亀岡市議を6期、農業委員を13期39年間務めました。

「あの戦争を正義の戦争という人が政権の中核に居座り、強引に戦争への国づくりを進める。これだけは認められない」と佐々木さん。「憲法、とくに9条は戦死者の遺言です。戦争体験者が次々亡くなっていく今、やってきたことを若い人に引き継いでいかなないと。反動的な動きをくいとめ、二度と戦争をさせないために頑張ってほしい」と命がつづく限り訴えていく決意です」

(西口友紀恵)